

アウシュヴィッツから教えられること

～2010年1月10日アウシュヴィッツ強制収容所を見学して～

2010.2.26

NPO 法人シャロームの会
理事長 菊地茂

1.アウシュヴィッツの歴史

- ・ポーランド国オシフィエンチム市（ドイツ名：アウシュヴィッツ）
- ・1940年4月27日 強制収容所建設開始
- ・1945年1月27日ソ連軍によってアウシュヴィッツ収容所解放される
(7000人の囚人が救出される)
- ・1947年7月2日ポーランド国会により「国立アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館」設立法決議

2.ヴィクトール・E・フランクル「夜と霧」(池田佳代子訳)より

○発疹チフス収容所に行く

「強制収容所の人間は、自ら抵抗して自尊心をふるい立たせないかぎり、自分はまだ主体性を持った存在なのだというのを忘れてしまう。内面の自由と独自の価値を備えた精神的な存在であるという自覚などは論外だ。人は自分を群衆のごく一部としか受けとめず、「わたし」という存在は群れの存在のレベルにまで落ち込む。きちんと考えることも、なにかを欲することもなく、人びとはまるで羊の群れのようにあっちへやられ、こっちへやられ、集められたり散らされたりするのだ。右にも左にも、前にも後ろにも、なりは小さいが武装した、狡猾で嗜虐的な犬どもが待ち受けていて、どなったり、長靴のかかとで蹴りつけたり、あるいは銃床で殴りつけたりしながら、ひっきりなしに前へ後ろへと追いまわす。私たちはまるで、犬に噛みつかれないようにし、隙あらばわずかばかりの草をむさぼることで頭はいっぱいの、欲望といえはそんなことしか思いつかない羊の群れのように感じていた。」

(P82～83)

○精神の自由

「人間の自由はどこにあるのだ、あたえられた環境条件に対してどうふるまうかという、精神の自由はないのか、と。人間は、生物学的、心理学的、社会学的と、何であれさまざまな制約や条件の産物でしかないというのはほんとうか、すなわち、人間は体質や性質や社会的状況がおりなす偶然の産物以外のなにもでもないのか、と。そしてとりわけ、人間の精神が収容所という特異な社会環境に反応するとき、ほんとうにこの強いられるあり方の影響をまぬがれることはできないのか、このような影響には屈するしかないのか、収容所を支配していた生存状況では、ほかにどうしようもなかったのか」と。

こうした疑問にたいしては、経験をふまえ、また理論にてらして答える用意がある。経験からすると、収容所生活そのものが、人間には「ほかにあり様があった」ことを示している。その例ならいくつでもある。感情の消滅を克服し、あるいは感情の暴走を抑えていた人や、最後に残された精神の自由、つまり周囲はどうであれ「わたし」を見失わなかった英雄的な人の例をはぼつぼつと見受けられた。一見どうにもならない極限状態でも、やはりそういったことはあったのだ。

強制収容所にいたことのある者なら、点呼場や居住棟のあいだで、通りすがりに思いやりのある言葉をかけ、なけなしのパンを譲っていた人びとについて、いくらでも語れるのではないだろうか。そんな人は、たとえほん

のひと握りだったにせよ、人は強制収容所に人間をぶち込んですべてを奪うことができるが、たったひとつ、あたえられた環境でいかにふるまうかという、人間としての最後の自由だけは奪えない、実際にそのような例はあったということを証明するには充分だ。」(P109～111)

「かつてドフトエフスキーはこう言った。「わたしが恐れるのはただひとつ、わたしがわたしの苦悩に値しない人間になることだ」

この究極の、そしてけっして失われることのない人間の内なる自由を、収容所におけるふるまいや苦しみや死によって証していたあの殉教者のような人びとを知った者は、ドフトエフスキーのこの言葉を繰り返し噛みしめることだろう。その人びとは、わたしはわたしの「苦悩に値する」人間だ、とすることができただろう。彼らは、まっとうに苦しむことは、それだけでも精神的になにごとかをなしとげることだ、ということを証していた。最期の瞬間までだれも奪うことのできない人間の精神的自由は、彼が最期の息をひきとるまで、その生を意味深いものにした。なぜなら、仕事に真価を発揮できる行動的な生や、安逸な生や、美や芸術や自然をたっぷりと味わう機会に恵まれた生だけに意味があるのではないからだ。そうではなく、強制収容所での生のような、仕事に真価を発揮する機会も、体験に値すべきことを体験する機会も皆無の生にも、意味はあるのだ。

そこに唯一残された、生きることを意味あるものにする可能性は、自分のありようががんじがらめに制限される中でどのような覚悟をするかという、まさにその一点にかかっていた。被収容者は、行動的な生からも安逸な生からもとっくに締め出されていた。しかし、行動的には生きることや安逸に生きることだけに意味があるのではない。そうではない。およそ生きることそのものに意味があるとすれば、苦しむことにも意味があるはずだ。苦しむこともまた生きることの一部なら、運命も死ぬことも生きることの一部なのだろう。苦悩と、そして死があつてこそ、人間という存在ははじめて完全なものになるのだ。

おおかたの被収容者の心を悩ませていたのは、収容所を生きしのぐことができるか、という問いだった。生きしのげられないのなら、この苦しみのすべてには意味がない、というわけだ。しかし、わたしの心をさいなんでいたのは、これとは逆の問いだった。すなわち、わたしたちを取り巻くこのすべての苦しみや死には意味があるのか、という問いだ。もしも無意味だとしたら、収容所を生きしのぐことに意味などない。抜け出せるかどうかの意味がある生など、その意味は偶然の僥倖に左右されるわけで、そんな生はもともと生きるに値しないのだから。」(P112～113)

「たとえば、強制収容所で亡くなった若い女性のこんな物語を。これは、わたし自身が経験した物語だ。単純でごく短いのに、完成した詩のような趣きがあり、わたしは心をゆさぶられずにはいられない。

この若い女性は、自分が数日のうちに死ぬことを悟っていた。なのに、じつに晴れやかだった。

「運命に感謝しています。だって、わたしをこんなにひどい目にあわせてくれたんですもの。」彼女はこれとおりにわたしに言った。

「以前、なに不自由なく暮らしていたとき、わたしはすっかり甘やかされて、精神がどうこうなんて、まじめに考えたことがありませんでした。」

その彼女が、最期の数日、内面性をどんどん深めていったのだ。

「あの木が、ひとりぼっちのわたしの、たったひとりのお友達なんです」

彼女はそう言って、病棟の窓を指さした。外ではマロニエの木が、いままさに花の盛りの時期を迎えていた。板敷きの病床の高さにかがむと、病棟の小さな窓からは、花房をふたつつけた緑の枝が見えた。

「あの木とよくおしゃべりするんです」

わたしは当惑した。彼女の言葉をどう解釈したらいいのか、わからなかった。譫妄状態で、ときどき幻覚におちいるのだろうか。それでわたしは、木もなにかいうんですか、とたずねた。そうだという。ではなんと？ それにたいして、彼女はこう答えたのだ。

「木はこういうんです。わたしはここにいますよ、わたしは、ここに、いますよ、わたしは命、永遠の命だって…」 (P116～117)

○暫定的存在を分析する

「被収容者を心理学の立場から観察してまず明らかになるのは、あらかじめ精神的にまた人間的に脆弱なものが、その性格を展開していく中で収容所世界の影響に染まっていく、という事実であった。脆弱な人間とは、内的なよりどころを持たない人間だ。では、内的なよりどころはどこに求められるのであろう、というのが次の問いだ。

元被収容者についての報告や体験記はどれも、被収容者の心にもっとも重くのしかかっていたのは、どれほど長く強制収容所に入っていなければならないのかまるでわからないあことだった、としている。被収容者は解放までの期限をまったく知らなかった。もしも解放までの期限などということが問題にされたとしたら（たとえばわたしがいた収容所では話題にのぼったことがなかった）、それは未定で、実際、無期限であっただけでなく、どこまでも無制限に引き延ばされるたぐいのものだった。ある著名な心理学者がなにかの折にこのことにふれて、強制収容所におけるありようを「暫定的存在」と呼んだが、この定義を補いたいと思う。つまり、強制収容所における被収容者は「無期限の暫定的存在」と定義される、と。」(P117～118)

「ある被収容者が、かつて、新たに到着した被収容者の長い列にまじって駅から強制収容所へと歩いていたとき、まるで「自分の屍のあとから歩いている」ような気がした、とのちに語ったことがある。この人は、絶対的な未来喪失を骨身に染みて味わったのだ。それは、あたかも死者が人生を過去のものと見るように、その人の人生のすべてが過去のものになったとの見方を強いるのだ。」(P120)

「現実をまるごと無価値なものに貶めることは、被収容者の暫定的なありようにはしっくりくるとはいえ、ついに節操を失い、墮落することにつながった。なにしろ「目的なんてない」からだ。このような人間は、過酷きわまる外的条件が人間の内的成長をうながすことがある、ということをおぼれている。」(P121)

○教育者スピノザ

「したがって、収容所生活が被収容者にもたらす精神病理学的症状に心理療法や精神衛生の立場から対処するには、強制収容所にいる人間に、そこが強制収容所であってもなお、なんとか未来に、未来の目的にふたたび目を向けさせることに意を用い、精神的に励ますことが有力な手立てとなる。被収容者の中には、本能的にそうした者たちもいた。その人たちはおおむねよりどころとなるものを持っていた。そこには大抵、未来のなにがしかが関わっていた。人は未来を見すえてはじめて、いふなれば永遠の相のもとにのみ存在しうる。これは人間ならではのことだ。したがって存在が困難を極める現在にあって、人は何度となく未来を見すえることに逃げこんだ。これがトリックというかたちをとることも多かった。」

(P123)

「来る日も来る日も、そして時々刻々、思考のすべてを挙げてこんな問いにさいなまれねばならないというむごたらしい重圧に、私はとつとつに反吐が出そうになっていた。そこで、わたしはトリックを弄した。突然、わたしは皓々と明かりがともし、暖房のきいた豪華な大ホールの舞台に立っていた。わたしの前には坐り心地のいいシートにおさまって、熱心に耳を傾ける聴衆。そして、わたしは語るのだ。講演のテーマは、なんと、強制収容所の心理学。今わたしをこれほど苦しめうちひしいでいるすべては客観化され、学問という一段高いところから観察され、描写される…このトリックのおかげで、わたしはこの状況に、現在とその苦しみにどこか超然としていられ、それらをまるでもう過去のもののように見なすことができ、わたしをわたしの苦しみともども、わたし自身が行う興味深い心理研究の対象とすることができたのだ。

スピノザは『エチカ』の中でこう言っていなかっただろうか。「苦悩という情動は、それについて明晰判明に表象したとたん、苦悩であることをやめる」(『エチカ』第五部「知性の能力あるいは人間の自由について」定理三)

しかし未来を、自分の未来をもはや信じることができなかつた者は、収容所内デ破綻した。そういう人は未来とともに精神的なよりどころを失い、精神的に自分に見捨て、身体的にも精神的にも破綻していったのだ。通常、こうしたことは何の前触れも無く「発症」した。そのあらわれ方を、わりと古株の被収容者はよく知っていた。私たちは見な、発症の最初の徴候を恐れた。それも、自分自身よりも、仲間にあられるのを恐れた。なぜなら、もしも自分にそれがあらわれたなら、もう恐れる理由もなくなるからだ。」(P 1 2 4～1 2 5)

「この一例の観察とそこから引き出される結論は、わたしたちの強制収容所の医長が折に触れて言っていたことと符合する。医長によると、この収容所は 1944 年のクリスマスと 1945 年の新年のあいだの週に、かつてないほど大量の死者を出したのだ。これは、医長の見解によると、過酷さを増した労働条件からも、悪化した食糧事情からも、季節の変化からも、あるいは新たにひろまった伝染病の疾患からも説明がつかない。むしろ大量死の原因は、多くの被収容者が、クリスマスには家に帰れるという、ありきたりの素朴な希望にすがっていたことに求められる、というのだ。クリスマスの季節が近づいても、収容所の新聞はいっこうに元気の出るような記事を書かないので、被収容者たちは一般的な落胆と失望にうちひしがれたのであり、それが抵抗力に及ぼす危険な作用が、この時期の大量死となってあらわれたのだ。

すでに述べられたように、強制収容所の人間を精神的に奮い立たせるには、まず未来に目的を持たせなければならなかつた。被収容者を対象とした心理療法や精神衛生の治療の試みがしたがうべきは、ニーチェの的を射た格言だろう。

『なぜ生きるかを知っている者は、どのように生きることに耐える』

したがって被収容者には、彼らが生きる「なぜ」を、生きる目的を、ことあるごとに意識させ、現在のありようの悲惨な「どのように」に、つまり被収容所生活のおぞましさや精神的に耐え、抵抗できるようにしてやらねばならない・

ひるがえって、生きる目的を見出せず、生きる内実を失い、生きていてもならないと考え、自分が存在することの意味をなくすとともに、がんばり抜く意識も見失った人は痛ましかぎりだった。そのような人々はよりどころを一切失って、あっというまに崩れていった。あらゆる励ましを拒み、慰めを拒絶するとき、彼らが口にするのはきまってこんな言葉だ。「生きていることにもう何も期待が持てない」こんな言葉に対して、いったいどう応えたらいいのだろうか。」(P 1 2 8～1 2 9)

○ 生きる意味を問う

「ここで必要なのは、生きる意味についての問いを百八十度方向転換することだ。わたしたちが生きることか

らなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ、ということを知り、絶望している人間に伝えねばならない。哲学用語を使えば、コペルニクス的転回が必要なものであり、もういいかげん、生きることの意味を問うことをやめ、わたしたち自身が問いの前にたっていることを思い知るべきなのだ。生きることは日々、そして時々刻々、問いかけてくる。わたしたちはその問いに答えを迫られている。考え込んだり言語を弄することによってではなく、ひとえに行動によって、適切な態度によって、正しい答えは出される。生きるとはつまり、生きることの問いに正しく義務、生きることが各人に課す課題を果たす義務、時々刻々の要請を充たす義務を引き受けることにほかならない。」(P 129～130)

「具体的な運命が人間を苦しめるなら、人はこの苦しみを責務と、たった一度だけ課される責務としなければならぬだろう。人間は苦しみと向き合い、この苦しみに満ちた運命とともに全宇宙にたった一度、そしてふたつとないあり方で存在しているのだという意識にまで到達しなければならない。だれもその人から苦しみを取り除くことはできない。だれもその人の身代わりになって苦しみをとことん苦しむことはできない。この運命を引き当てたその人自身がこの苦しみを引き受けることに、ふたつとない何かを成し遂げるたった一度の可能性はあるのだ。

強制収容所にいた私たちにとって、こうしたすべては決して現実離れした思弁ではなかった。私たちにとってこのように考えることは、たった一つ残された頼みの綱だった。それは、生き延びる見込みなどなど皆無の時に私たちを絶望から踏みとどまらせる、唯一の考えだったのだ。わたしたちは生きる意味というような素朴な問題からすでに遠く、なにか創造的なことをして何らかの目的を実現させようなどとは一切考えていなかった。私たちにとって生きる意味とは、死もまた含む全体としての生きることの意味であって、「生きること」の意味だけに限定されない、苦しむことと死ぬことの意味にも裏づけされた、総合的な生きることの意味だった。この意味を求めて、わたしたちはもがいていた。」(P 131～132)

○ 医師、魂を教導する

「わたしは未来について、またありがたいことに未来は未定だということについて、さらには苦渋に満ちた現在について語ったが、それだけでなく、過去についても語った。過去の喜びと、わたしたちの暗い日々を今なお照らしてくれる過去からの光について語った。わたしは詩人の言葉を引用した。「あなたが経験したことは、この世のどんな力も奪えない」

私たちが過去の充実した生活の中、豊かな経験の中で実現し、ここの宝物としていることは、何もだれも奪えないのだ。そして、私たちが経験したことだけでなく、私たちがなしたことも、私たちが苦しんだことも、すべてはいつでも現実の中へと救いあげられている。それらもいつかは過去のものになるのだが、まさに過去のなかで、永遠に保存されるのだ。なぜなら、過去であることも、一種のあることであり、おそらくはもっとも確実なあることなのだ。

そしてわたしは最後に、生きることを意味で満たすさまざまな可能性について語った。わたしは仲間たちに語った。横たわる仲間たちはひっそりと静まり返り、ほとんどピクリとも動かなかった。せいぜい、時折かすかにそれとわかるため息が聞こえるだけだった。人間が生きることには、つねに、どんな状況でも、意味がある、この存在することの無限の意味は苦しむことと死ぬことを、苦と死をもふくむのだ、とわたしは語った。」(P 137～138)